

Title	Alcoholics Anonymousの回復プログラムの再考： ベイトソンのサイバネティックス的理解を用いて
Sub Title	The reconsideration of the recovery programs of alcoholics anonymous: using Bateson's idea of cybernetics understanding
Author	大沼, 麻実(Onuma, Asami)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.71 (2011.) ,p.81- 98
JaLC DOI	
Abstract	Alcoholics Anonymous, the self-help group of the alcoholism that was born in the United States of America in 1935, has set a new trend for the recovery of the dependency and produced pioneering results in the world of the dependency. Bateson was known to understand the AA and alcoholism from the viewpoint of cybernetics. Insisting that what drives alcoholics to drinking is the false epistemology about alcohol such as putting too much confidence in the self-control (symmetric pattern), Bateson points out that the AA was successful in facilitating the shift from false to new epistemology that alcoholic is powerless over alcohol. However, even if the epistemological shift helps prevent a symmetric pattern, this does not necessarily guarantee that the shift actually takes place. Then, the AA is assumed to have a balanced, practical adjustment function that controls the symmetric tendency of the AA members. In this paper, I shall adopt a viewpoint of the cybernetics and analyze the AA meetings and 12 steps that are both crucial to the AA program, trying to show that the AA meeting actually controls a symmetric pattern of the alcoholic with the "only talk and only hearing" rule. Then I shall conclude that the 12 steps prevent not only the symmetric pattern but also complementary pattern by not ranking AA members. In summary, the AA programs avoid competitive mutual relations using symmetric and complementary patterns, thus preventing schismogenesis of AA group.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Alcoholics Anonymousの回復プログラムの再考

——ベイトソンのサイバネティック的理解を用いて——

The Reconsideration of the Recovery Programs of Alcoholics Anonymous

—Using Bateson's idea of Cybernetics Understanding—

大 沼 麻 実*

Asami Ohnuma

Alcoholics Anonymous, the self-help group of the alcoholism that was born in the United States of America in 1935, has set a new trend for the recovery of the dependency and produced pioneering results in the world of the dependency. Bateson was known to understand the AA and alcoholism from the viewpoint of cybernetics. Insisting that what drives alcoholics to drinking is the false epistemology about alcohol such as putting too much confidence in the self-control (symmetric pattern), Bateson points out that the AA was successful in facilitating the shift from false to new epistemology that alcoholic is powerless over alcohol. However, even if the epistemological shift helps prevent a symmetric pattern, this does not necessarily guarantee that the shift actually takes place. Then, the AA is assumed to have a balanced, practical adjustment function that controls the symmetric tendency of the AA members. In this paper, I shall adopt a viewpoint of the cybernetics and analyze the AA meetings and 12 steps that are both crucial to the AA program, trying to show that the AA meeting actually controls a symmetric pattern of the alcoholic with the “only talk and only hearing” rule. Then I shall conclude that the 12 steps prevent not only the symmetric pattern but also complementary pattern by not ranking AA members. In summary, the AA programs avoid competitive mutual relations using symmetric and complementary patterns, thus preventing schismogenesis of AA group.

はじめに

依存症の症例とその治療や回復法の展開は、単に依存症自体の研究やそれを治療する手だての知見の進展というだけではなく、自己のあり方と世界のあり方について根本的に考察する契機を与えてきた [Roman, 1988: 532-535]。そのなかでも、アルコール依存症の自助グループである Alcoholics Anonymous (AA¹⁾) は、依存症の回復に新しい潮流を生み出し、依存症の世界において先駆的な成果を挙げ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

てきた [Kurtz, 1979]。AAのプログラムは、継続的な断酒を可能にする効果の手だてとなることが認められてきたが、今日では、医療者や生活保護費を支給する役所、治療の斡旋を行う福祉事務所などからもAAのプログラムは信頼を勝ち得ている。北アメリカや日本において、アルコール依存症の治療をおこなう精神科病院の医療チームも、依存症者に対して積極的にAAにつながることを勧めるようになった現在の状況は、AAのプログラムの成功を雄弁に物語っている。AAのプログラムのうちの主要なひとつをなす12ステップ²⁾は、病院のミーティングや中間施設³⁾でも使われており、1935年アメリカ合衆国で誕生したAAはその宗教的な側面からくる違和感を超えて、現在、北米や欧州以外の世界各地の非キリスト教圏でも受け入れられている⁴⁾。日本においても、1975年に日本のAA支部組織形成時に導入されて以来、現時点までAAのプログラムの影響は非常に大きくなってきている。

こうしたAAの進展をめぐる状況を全般的に理解するために、さまざまな研究がおこなわれつつある。日本でもAAのプログラムの回復効果をめぐる研究は行われており、たとえば葛西は、「重要な他者」として、「仲間」の存在がAAでの断酒の継続に大きく関わっていることを指摘する。また平野のように、ミーティングでの他者との関わりや集団の持つ力が、断酒のみならず依存症者の生き方を変えたり人間的に成長するきっかけを与えているとする研究は多い [平野, 1995]。このように先行研究は、AAのプログラムがなぜ回復をもたらすのかについて、その成功因子を細かく選り分け、その選り分けによって、議論の焦点を狭く限定することによって、おのおの成功因子を弁別してきたといえる。すなわち、これまでの諸研究はAAの特徴を細分化するかたちで分析しやすくし、そうして細分化した個々の特徴をAAの成功因子として評価してきたのである。

先行研究は、目標としてはAAの全体的特徴の把握を目指してきたものの、現実には、細分化したものをあとで集合化し、それをAAの全体像としてきたといえる。そのため、依存者がAAのプログラムを使いこなすやりかたを、プログラムがシステム全体として依存者に提供する自己認識の変化経験の過程から全体的に把握するという研究方向を生み出し得なかったといえる。

では、なぜ先行研究ではAAプログラムをシステムとしてのレベルからAA分析がなされてこなかったのであろうか？ その背景として考えられるのは、医療では完全治療できなかったアルコール依存症が、どうしてミーティングを主体とするAAによって回復できるのかという問題設定に迫る場合、治療と回復という対比を分析の主要軸としてきたためではないだろうか。AAでは、アルコール依存症の生物医学的な治療は現時点での医科学においては難しいが、あくまで回復は出来るというスタンスをとっている。この点のアピールが強いから、治療対回復という対比に先行研究が寄りかかってしまったのであろうと思われる。さらに、AAの上記のスタンスは経験実証科学的な立証によるものではなく、当事者の経験から作られたプログラムの実践的有効性に依拠している。ゆえに、先行研究は、回復の過程の経験の側面だけに焦点を合わせるやりかたを主とするような傾きをみせ、依存者の経験を媒介するAAのプログラムのシステムミミックな機能を想定するに至らなかったと言えるのではなかろうか。

このことから筆者は、依存症者同士の自助グループに通うことが飲酒癖の停止を促進する点に注目し、生物学的精神医学パラダイムとは別のパラダイムによって治療や回復の意味を考え直す研究は一定の意義をもつと考える。本研究はまず、AAのプログラムが依存症者の〈自己の認識転換〉をもたらす点に注目し、エピステモロジーの分析がAAプログラムによる回復過程の理解に重要となることを確認する。さらに、東京の特定のAA⁵⁾、および、AAと病院の中間に位置する組織であるマック⁶⁾でおこなった事例調査にもとづき、集団過程を分析する枠組みをバイトソンの理論を応用して試論的に用意

し、考察する。

アメリカから導入された経緯をもつとはいえ、日本型の集団過程を示す東京の特定のAAやマックにおける依存症回復事例を理解するためには、自己の認識論⁷⁾の位相に照準を合わせるだけでなく、AA型プログラムによる集団過程に照準をあわせて分析するべきである。この点は、先行研究が未だ手がけていないため、本研究は新たな視点を提示することを目的としている。しかしながら、今後さらに追加事例調査をおこなうなかでより確定的な立論がなされる必要があるため、現段階では、理論的試論を呈示するという体裁となる。なお、AAには様々なプログラムがあり、それらを組み合わせたものがプログラムの全体をなすわけだが、本研究では、主要部分であるミーティングと12ステップというふたつのプログラムに照準をあわせる⁸⁾。なぜならAAの中心的活動であるミーティングと、回復プログラムとして提示されている12ステップは、AAのプログラム全体の根幹をなしているからである⁹⁾。

理論的な枠組みとしては、サイバネティクス理論を用いてアルコール依存の世界に対する分析をおこなったベイトソンが手がかかりとしたい。なぜならベイトソンの分析概念を用いることで、AAプログラム全体におけるアルコール依存症者の自己認識の変化をみることができるからである。

ベイトソンは第3次サイバネティクスの枠組みに沿って、アルコール依存症者の自己認識をサイバネティクスの視点から分析した。さらに、集団過程の概念を依存症者に適用し、飲酒を繰り返してしまうアルコール依存症者にみられる、ある相互作用的パターンについて説明している。つまりベイトソンの説明は、アルコール依存の世界における認識論を依存症者のレベルから見ようとしたものである。

サイバネティクスに基づくベイトソンのこの分析は、AAではたらく相互作用的システムを全体論的に分析しようとする本研究の目的に大いに役立つ。サイバネティクス理論を用いてベイトソンがAAでの認識論の転換を個人レベルから描き出したのに対して、本研究はそれをAAでの集団過程レベルから分析し直し、AAプログラムのシステム論的な働きを明らかにしようとするものである。

1. アルコール依存の世界における認識論

1.1 西洋的な自己認識論の転換とサイバネティクス

グレゴリー・ベイトソンは多様な業績を持っており、ニューギニアのイアトムル族やバリ島調査に代表される文化人類学的研究のみならず、生物学、社会学、精神医学、動物行動学など様々な分野を横断する形で独自の理論を進めてきた思想家である。フロイト心理学が精神の概念を内側へと拡張し、自律的で習慣的な無意識の体内コミュニケーション・システムの領域全体をそれに含めたのに対し、ベイトソンは自分の主張が精神の概念を外側に拡張するものであると述べた [ベイトソン, 1972: 461 (邦訳612)]。その視点は彼独特の〈精神の生態学〉として探求された¹⁰⁾。精神の生態学では、「精神mind」は、「観念idea」の相互作用をサブシステムとして内包しており、さらにその精神は、環境との間により大きな生態学的システムを成しているという¹¹⁾。

精神の生態学の探求において、ベイトソンの思考をつかさどっているのは「サイバネティクス」の概念である。サイバネティクスとは、1948年アメリカの数学者ノーバート・ウィーナーが、通信と制御の全領域を指して提唱したものである [ウィーナー, 1948: 19 (邦訳14-15)]。ウィーナーは、情報が伝達される際に双方向にフィードバックされるシステムに着目した [ウィーナー, 1950: 151-152 (邦訳172)]。このシステムの内部では、まさに室温調節装置のサーモスタットのように、何らかが増大するのに伴ってほかが増少するというシステムによって、平衡を保とうとする調節機能である「負の

フィードバック」が働いているとされる [ウィーナー, 1948: 115 (邦訳117)]。その場合, 制御できないもの (不確定なもの) を統計的に捉えて情報とすることで, その結果として制御できるようになるという考え方と連動している。

ただしウィーナーの独自性は, 機械のみならず生体組織内においても, 通信と制御と統計力学を中心とする一連の問題として科学的に分析することができると考えた点にある [ウィーナー, 1948: 113-136 (邦訳115-138)]。サイバネティックスの見方によるならば, 情報は機械工学においても生物学においても, 因果的伝達経路のネットワーク内で差違が変換されながら伝播する。そしてその情報を効果的に制御することによって, 目的を達成し, 機械および生物はホメオスタシス (恒常性) を保つという特徴がある。つまりサイバネティックスとは, 情報が伝播するシステムを量的な側面を扱う機械論から捉えるのではなく, 質的な側面にあたる目的論から統合的に捉えようとする考え方なのである。

ベイトソンはこのサイバネティックスの考え方を社会集団に応用することで, 集団内部における自己制御的な調節システムの働きを分析しようと試みた。さらには, 「精神」, 「自己」, 「人間関係」などの諸概念についても, サイバネティックスに基づく認識論に立って捉え直していかなければならないという [ベイトソン, 1972: 309 (邦訳421)]。つまり精神についていえば, サイバネティックなシステムにおいてフィードバックが起こるということは, 精神が自己修正的なプロセス全体を通して変容することを意味する。精神のサイバネティックスにおいては, 差違の情報がシステム上の回路をめぐることで, 新たな差違が生まれ, 再び回路をめぐるという循環システムが起こっていると考えるのである。

ベイトソンによれば, 精神の生態学はデカルトによる物心二元論からの脱却を意味している [ベイトソン, 1972: 337 (邦訳454)]。デカルトの二元論による西洋的な〈自己self〉の観念は, 〈精神〉を〈物体〉すなわち肉体や環境と分離して考えてきた。この二元論の誤謬によって引き起こされた問題として, ベイトソンはアルコール依存の世界を取り上げて議論している。アルコール依存症者は, 飲酒してしまうのは自己の意志の弱さだという〈自己対酒〉の二元論にもとづく考えからプレッシャーを与える周囲の人達や自分自身に対して, 自分の心の強さを証明しようとする。自己制御の力を過信する誤った認識論が, 最初の飲酒のひとくちへの挑戦を駆り立てるわけである。

だが当然のことながら, 意志の強さを示すための酒への挑戦は, 本来やめなければならないはずの飲酒という結果に陥ってしまう。つまり依存症者が最初一杯に手を付けてしまうという行為は, アルコール依存症者の既存の認識論による自己像と矛盾するばかりか, さらなる飲酒に結びついてしまう。

この矛盾が意味するのは, 二元論による自己制御の認識論と飲酒との首尾一貫性である。逆にいえば, 二元論による自己制御の認識論が実はエラーであるからこそ, 依存症者は断酒することができない。つまりベイトソンは, 酒に対する自己制御の誤りが, 飲酒の悪循環につながっており, それがアルコール依存症の原因になっているのではないかと考えた。よって, アルコール依存から依存症者が抜け出るためには, 誤りである自己制御重視の認識論とは異なった, 自己と世界に関する認識モデルで問題に対処していかなければならない。

はからずもベイトソンに代表されるようなこうした考え方が起こる以前から, 西洋的な自己の認識論を転換させ, 依存症者のソブラエティ (飲まないで生きること) に成功している団体があった。それが, アルコール依存症者の自助グループAAである。ベイトソンは, AAのステップ1に書かれている「われわれはアルコールに対して無力であり, 生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた」という考え方が, 「降伏」ではなく, 「認識論epistemology」の転換というべきものだと指摘する¹²⁾。なぜ

なら実際のところ飲酒は止まったのであり、またそれを止めたのは意志の強さではない。その要因は、アルコールに対して無力だというAAの認識論の転換にほかならないというわけである。

1.2 ベイトソンによる集団過程の分析概念

アルコール依存症という現象において、ベイトソンはサイバネティックスの立場から西洋的な自己の認識論の誤りを導きだした。そしてこの西洋的な自己の認識論を転換させたことが、AAの成功に結びついているとする。逆にいえば、アルコールに対して無力だというAA型の認識論との比較において、アルコールへの挑戦は西洋的な自己の認識論によって促されていることになる。ベイトソンは、こうした西洋的な認識論によって依存症者がアルコールに挑戦してしまうのは、依存症者の「対称的symmetric」な相互作用パターンによるものだとする〔ベイトソン, 1972: 325-326 (邦訳440-441)〕。

「対称的」という表現は、ベイトソンがニューギニアのイアトルム族に対するフィールドワークから生み出した概念である。このフィールドワークでベイトソンは、父系半族型イアトルム社会での関係上の葛藤やそれを解消する方法に注目した。イアトルム族は、日常的にみられる対称的対抗関係による社会的不和をナヴェンという儀式を通して解消し安定をはかる〔Bateson, 1936〕。つまりイアトルム族には、集団内部にみられる氏族間の境界や男女間のエトスの差異の対称的増幅によって、集団が分裂するのを食い止める働きがあったのである。

ベイトソンはこれを人間関係論に適用し、Aがある行為を示すとBもそれと同じ行為を繰り返すという「対称的symmetric」な相互作用パターンと、Bの行為がAの行為とは異なりながらもAの行為を助長するような「相補的complementary」な相互作用パターンという概念装置を生み出した〔Bateson, 1936: Second edition 175-178〕〔ベイトソン, 1979: 105, 192-193 (邦訳143, 262-263)〕。対称的な関係性と相補的な関係性の問題は、いずれのパターンも進行しすぎれば関係性に「分裂生成schismogenesis」が起こる可能性がある〔ベイトソン, 1972: 61-72 (邦訳119-130)〕。一方は「対称型分裂生成」と呼ばれ、競争や張り合いが強まることによって集団が分化してしまうことになる。もう一方は「相補型分裂生成」と呼ばれ、支配する側と服従する側という相互補完的な関係性がエスカレートすると、集団成員の性格をそれぞれの方向へ歪めていき、それが両者間の敵対性を強めて、関係システムを崩壊させ集団が分化してしまうのである〔ベイトソン, 1972: 67-69 (邦訳125-126)〕。ただし、分裂生成は、ベイトソンがイアトルム社会で論じたように、対称型と相補型がそれぞれエスカレートしないようそれぞれの要素が集団内に組み入れられることで回避できる場合がある。

この概念を用いてベイトソンは、飲酒してしまうアルコール依存症者が、〈他者〉に対して対称的であり、終始分裂生成的な関係に走ると指摘する〔ベイトソン, 1972: 326 (邦訳441)〕。ここで打ち負かそうとしている〈他者〉とは、実際に存在している他者とは限らず、完全な想像の産物か、あるいは、自分が依存し、愛してさえるかもしれない誰かが、グロテスクなまでに姿を歪めた存在であるという〔ベイトソン, 1972: 328 (邦訳443)〕。つまり依存症者は打ち勝つべき弱い自己と、打ち負かすべき〈他者〉と格闘していることになる。このような依存症者が対称型分裂生成の過程を経て、かならずや飲酒におぼれてしまう結末となる。この点をベイトソンの視点から捉えるなら、そうした対称的な自己制御をゆるめ、たとえ一時的なものであれその認識論から解放してくれる手段がすなわち飲酒なのである。

2. 関係性の分裂生成を回避するための平衡的調節機能

2.1 AAプログラムにおける負のフィードバック

AAにおける認識論の転換は、こうした一連の現象による分裂生成を回避するといえる。なぜなら、アルコールに対して無力だと認めることによって依存症者は、意志の問題であるという二元論的な認識論からは原則的に解放され、そうした思考をもつ自己や他者と張り合わなくて済むからである。しかもAAは、こうした集団過程の概念を使って飲酒のメカニズムを分析したわけでもなければ、上述のベイトソンのように自己の認識論について理論的に捉えていたわけでもない。試行錯誤的な経験のなかから、飲酒を断酒に変える効果的な実践的プログラムを開拓してきたのである。そして飲酒欲求に「病氣」という位置づけをし、かつステップ1でアルコールに対して無力だという認識論へと変えるというやりかたで、AAは対称的パターンをうまく回避しているのである。

だが、AAにおける分裂生成の回避要因が認識論の転換だけだと考えるのは不十分であると筆者は考える。第一に、AAの提示する認識論が、たとえ対称的パターンを回避することに役立つとしても、それはあくまで原理的なものであるという点が挙げられる。つまり、AAに参加しても実際に認識の転換が起こるとは限らないうえに、たとえそれが行われたとしても、依存症者や周囲の者たちがそれまで培ってきたであろう西洋的な二元論にもとづく認識方法自体が変わったわけではない。AAのおかげでアルコールが止まっているという事実が、依存症者のAAへの信頼を高めても、対称的パターンを手放すことに直接結びつくわけではないはずである。

というのもミーティングにおいて、AAに通う依存症者がAAで使われる表現や12ステップに対して懐疑的な意見を言ったり、「AAのプログラムが効いているのかどうかはわからないが、いままで何をしても止まらなかった酒が止まっているからAAに通っている」というような表現をすることが多々ある。ミーティングは「言いつばなし聞きつばなし」が原則であるため、それに対して直接他のメンバーが意見することはない。だがその発言の後に、他のメンバーがそうした意思表示を受けてであるに違いないと推測される発言を行う場合がある。つまり、AAに全幅の信頼を置いているわけではないという言い回しに対して、暗に批判をするわけである。

こうした対称的な行動パターンが起こる背景には、自己は他者を意志によってコントロールできるはずだという認識が横たわっているのであり、それはベイトソンがいうところの西洋的な認識論ゆえになせる業だということができる。つまりたとえアルコールに対する認識論が転換されたとしても、依存症者の相補的な考え方がすべての関係性に対して適用されるわけではないのだと言えるわけである。そもそも対称的パターンは、人間が生きて行くうえで避けがたい側面がある。少なくとも我々は、そういう社会に生きているはずである。よって、AAのプログラムをこなしていく際にも、対称的な相互作用のパターンが引き続き起こりうると思うのが妥当である。

対称的な相互作用のパターンだけではなく、相補的な相互作用のパターンも起こりうる。AAには「スポンサーシップ」という活動がある。スポンサーシップとは、AAの回復のプログラムのなかで歩みを進めたアルコールク¹³⁾が、AAで飲まない生き方を達成し、継続させていこうと努力しているもう一人のアルコールクと個人的にソプラエティの経験を継続して分かち合うことである〔NPO法人AA日本ゼネラルサービス, 1987: 5〕。この関係性は、導かれる側の〈スポンシー〉が、導き手として〈スポンサー〉になってくれるよう古参者に対して依頼することからはじまるが、AAではスポンサー

とスポンシーは対等な関係とされている。主に飲まない生き方を学びはじめた新参加者が、飲酒欲求がわきあがってきた時に相談したりミーティングの時間以外に起こってくる疑問を尋ねたりするための制度である。だがこの制度は、スポンシーの側がAAに定着し回復していくのを助けるだけではなく、スポンサーの側にとっても飲まない生き方をより強固なものにするといわれている [NPO法人AA日本ゼネラルサービス, 1987: 13]。

だが対等であるとされるものの、古参加者が新参加者にアドバイスをするという関係性は、ときに関係的対立を生み、対称的な作用のパターンに至ることがある。また反対に、スポンサーとスポンシーの上下関係が著しくなり、相補的な相互作用のパターンに陥る恐れもある。スポンサーが構いすぎたり、スポンシーが過度に頼りすぎたりといったように、相手への依存が激しくなる場合があるからだ。筆者がインタビューした中にも、スポンサーシップでのこうした経験を話すメンバーは少なくない。

そして認識論の転換だけを分裂生成の回避要因として考えるのは不十分であるとする第二の理由として、認識論の転換だけでは説明しきれない問題がある。先に述べたように、サイバネティクス理論では、システム内部は相互作用する回帰性を持ち、その一連の現象は平衡的調節機能の働きとして理解することができる。つまり、AAが集団として分裂生成を免れている背景には、システムの内部において増大と減少の平衡による「負のフィードバック」が働いていると考えられる。逆にいえばそれは、ベイトソンが指摘するような、何らかが増大するのに伴ってほかも増大するような「正のフィードバック」を避ける働きである。

ベイトソンはアルコール依存症の問題を取り上げた際に、依存症者とその周りを取り巻く環境において対称型や相補型という言葉を使っているものの、AAのプログラム全体をシステムとして捉えてそれらの概念を適応して分析するとどうなるのかという仕事はなしていない。むしろ触れていないだけであって、システム論にこだわるベイトソンが、AAの成功を認識論の転換のみによるものだと考えているはずがないことは言うまでもないだろう。しかしながらAAは集団組織である以上、人間関係により成り立っているのであり、対称型および相補型のパターンが生じることは明らかである。よって正のフィードバックによって分裂生成する可能性は、AAにおいてもあるはずである。

では、AAが分裂生成を回避するためにどのような負のフィードバックが働いているのだろうか。そのひとつとして考えられるのが、AAメンバーのアイデンティティの受容である。AAメンバーがアルコールに対して無力な依存症であると認めることを、ベイトソンは認識論の転換として分析したが、それをキャロル・カインは、アイデンティティまたは自己理解の変容として分析した。その具体的な事例研究としておこなったのが、アンドリューとハンクに対する比較研究である [Cain, 1991: 210-253]。

カインによれば、アンドリューとハンクの両者はそれぞれ自分がアルコール依存症であり、かつアルコール依存症は「病気」であるという考え方を受け入れている。だが両者の違いは、アンドリューがAAのアイデンティティを受け入れなかったのに対し、もう一方のハンクはそれを受け入れたという点にある。つまりハンクは、ミーティングでの自らの語りを、AAの理念に沿って変容していったのである。二年後の彼らを追跡調査した結果、AAのアイデンティティを受け入れたハンクはソプラエティが続いていたが、アンドリューは飲酒が続いており職も住まいも失った状態であった。

カインの研究は、AAで経験される変化が、アイデンティティの変容、つまり自己を理解する方法の変容であり [Cain, 1991: 244]、アルコール依存症が「病気」であることや自分が依存症者であるということを知っていたとしても、その理解だけで断酒に至るとは限らないということを示している。同様

の研究として挙げられるのが、デンジンの研究である。デンジンは、AAの理念を習得することで依存症者のアイデンティティが変容し、それが依存症者の継続的断酒に大きく関わっていると述べている [Denzin, 1992, 1987 & 1987]。AAでのアイデンティティを受け入れるということが意味するのは、ベイトソンの言葉を借りれば、AAという集団に対して、依存症者は相補的なパターンを展開しているということである。つまりサイバネティックスの視点から見れば、こうした研究は、アイデンティティの変容がAA内の対称的なパターンを回避する要因であることを指摘しているといえる。

先に挙げたような、AAでの仲間の存在の影響力や人間的な成長といった先行研究の指摘も同様に、AAにおける分裂生成の回避要因を考えるうえで重要な視点をもたらす。AAメンバーがAAに参加し続けるのは、プログラムを継続することで考え方や言動が大きく変化し、かつそれが回復に役立っていると考えからである。この点に関して、先行研究はAAプログラムを継続するメンバーの内面的変化を非常に繊細なたちで分析しているといえる。だが一方で、サイバネティックスの視点でみれば、こうした研究が指摘しているのは、分裂生成を回避する要因のなかでも、依存症者がAAプログラムを継続することによって機能する要因である。つまりそれは、AAに継続的に通うはずの依存症者を前提としたAAの機能なのである。

AAに通っているのは年数を重ねた古参者ばかりではないし、必ずしもAAのアイデンティティを受け入れた者だけが参加しているとは限らない。そのうえベイトソンが指摘したように、アルコール依存症者は対称性に強くとらわれている。対称的なパターンが集団内部で増幅した場合、AAの集団システムとしての均衡が揺らぐ可能性があり、対称型分裂生成が起きやすくなると考えられる。AAの基本的理念とルールである「12の伝統」や「12の概念」が、集団の分裂生成を抑制している面は大いにあるだろうが、それを忠実に守りながらAAの活動を維持していかなければならないのは、紛れもなくこうした多様な立場の依存症者たちである。このことを受けて筆者は、AAにはメンバーの対称的傾向を抑制するような、システム上の何らかの平衡的調整機能が働いているのではないかと考える。すなわちこれは、AAのプログラムをサイバネティックスの視点から捉えるとどうなるのかという問いである。

そこでまず、サイバネティックスの目的論的な思考方法によって、システムとしてAAのプログラムを捉えてみたい。

2.2 目的論的な視点から捉えるAAのプログラム

AAが提示する活動目的は、〈回復〉・〈一体性〉・〈サービス〉の大きく三つに分けられる¹⁴⁾。一つ目の〈回復〉は、いうまでもなく依存症からの回復を意味する。二つ目の〈一体性〉は、仲間と調和を保って回復を共に目指すという集団の一体性のことである。三つ目の〈サービス〉は、AAのメッセージを必要とし望んでいる人にそれを運ぶことである。

「依存症の回復」、「集団の一体性」、「メッセージの伝達」というこの三つの目的は、サイバネティックスの目的論的かつ全体論的な視点で統合的に捉えた場合にはどうなるのか。それは、ベイトソンの集団分析概念でいえば、「依存症者と他のメンバーとの分裂生成の回避による集団システムの平衡」ということになるだろう。というのも、もし依存症者や他のメンバーとの対称的なパターンが増幅すればメンバー間の軋轢を生み、依存症者はAAから離れざるをえなくなる。それは、個人の回復だけでなく、AAが集団として維持することからも遠ざかることを意味する。つまり、AAが集団システムの平衡を保つには、なによりも依存症者の対称的なパターンを回避することが不可欠なのである。

ではAAプログラムは、どのようにこれらの分裂生成を回避し、集団システムとしての平衡を保っているのだろうか。それを明らかにするため、次章ではあるメンバーによるミーティングに参加した初日についての語りを取り上げたい。なぜそのメンバーの初日の話を取り上げるのかといえば、当メンバーがその日にAAで経験したことは、AAに通うことで徐々に培われる認識の変化によるものではないからである。サイバネティックスの視点でいえば、そのメンバーが語るのは、AAに通うことによって変容した認識が捉えたAAのシステムではないことになる。そのため、AAプログラムのシステムが、このメンバーの従来からの認識に限りなく新しい最初のインパクトを与えた際の現象だということができるのである。

3. サイバネティックスによるAAのプログラムの分析

3.1 AAのミーティングにおける対称型分裂生成の回避システム

筆者によるインタビュー調査において、あるAA古参者は次のように語った¹⁵⁾。

自分はただの大酒飲みだと思っていた。精神病院につながっても自分を捨てきれなかった。この俺様がなぜ精神病院なんだと。でももはや行く場所がなかった。嫌だともいえずとどまるしかなかった。そのことが救いだっように思う。[もはや] 飲まない依存症者に出会い、プログラムに出会った。AAに初めて行ってワンデーのメダル¹⁶⁾ をもらった時、こいつらに絶対なめられないぞと思っていた。かかってこいと。メダルをもらった時に自分よりもごっついやつが、握手を求めて手を出してきた。何すんだこの野郎と思った。気持ち悪いと。だけれど、何だこの野郎と思いはしたけど口には出せなかった。出されたもんだから、なぜか分からないけど手が出た。今までだったら、ふざけんな！ですんでいた。一時間半、長くて退屈だったのに、椅子を蹴って〔会場を〕出てくることもできたのに、そう思っていたのに、なぜかそれもしなかった。そんなときに何にも問題を起こしていない自分、一時間半じっとしている自分に気づいた。それが次の日も次の日も繰り返し続いていった¹⁷⁾。

サイバネティックスの視点でみれば、これは先に述べたように、ミーティングに通っているうちに変化した認識というよりも、AAに参加した初日に味わった「制御」の経験についての語りである。この依存症者に認識されている自己は、従来の対称的パターンが制御され、AAという集団において相補的になっている。

むろん、「行く場所がなかった」という依存症者側からの物理的な要素も、「集団の輪を乱さなかった」という制御の一因になっていると考えられる。だがこのメンバーは、精神病院では大酒飲みにすぎないという自分を捨てきれなかったと語っており、その大酒飲みにすぎない自己はアルコール依存症の集団とは対極にいる。たとえ行く場所もなく嫌だとは言えない状況下にあったとしても、このメンバーは、非常に強い対称的パターンによって集団に対峙しているのをはっきり自覚している。その場合に、何も問題を起こしていない自己を認識する必要はない。いうなれば対称型の自己が認識するのは、ひたすら我慢した自己だけでよいはずであり、集団に相補的になった自己を認識する必要はないのである。つまり、この依存症者がAAに初めて行ったときにすでに認識していたのは、自己の変化というよりも、システムの中でフィードバックされているような相補的な自己である¹⁸⁾。

サイバネティクスの視点で捉えた場合、ここでは対称的なパターンを増幅しないシステムが働いていると想定される。つまり依存症者その他のメンバーとの分裂生成を回避するという目的において、対称的な行動パターンを成立させないシステムである。ミーティングでの独特のシステムという点で考えた場合、原則とされている「言いつばなし聞きつばなし」がそれにあたると考えられる。なぜなら「言いつばなし聞きつばなし」という原則は、たとえ自分が対称型の相互作用パターンを相手に対して望んでいたとしても、自分から対称型の行動パターンを起こすための理由を与えないからである。つまり、相手がこの原則を破ってこない限り、自分が対称型の行動パターンをとることは、単なる一方的な言いがかりにすぎないのである¹⁹⁾。

このようにミーティングでは、対称的行動パターンが原則的ルールによって禁じるというかたちで抑制されているのではなく、システム内の平衡を保つような働きによってなされている。つまり、批判や意見をしない／されないという「言いつばなし聞きつばなし」の原則が、単に言い争いが起こるのを避けるだけでなく、内的な対称型パターンを「制御」していると考えられるのである。

先に挙げたAA古参者の発言には、なぜ自分が暴言を吐いたりせずに集団内にいられたのかという疑問符がついている。何も問題を起こしていない自分に気づきつつも、その感情がどこへ収束していったのかという問題に、そのメンバーははっきりとした答えを見いだしているわけではない。あくまでもAAシステムの中でフィードバックされているような、相補的な自己が認識されているだけである。筆者が、AAミーティングをサイバネティクスによる分析でみようとする理由がここにある。はっきりとした認識下に置くことのできないままに捉えられた認識を、どのように把握できるのかという問題である。

では次に、12ステップにおける分裂生成の回避システムをみていくことで、サイバネティクスで捉えることの意義をさらに深めていきたい。

3.2 12ステップにおける対称型／相補型分裂生成の回避システム

AAメンバーの回復の原理とされる12ステップは、AA設立から4年後の1939年に、それまでの活動とそこから学び取ったものをメンバーの話し合いによってまとめたものである²⁰⁾。そうした蓄積された経験からつくられた12ステップは、アルコールに対して無力であると認めることなど、有効な回復手段として提示される12の項目からできている(表1を参照)²¹⁾。

その12ステップは、大きくわけて4つの要素から成り立っていると言えるだろう。(1)無力を認め、(2)自分を越えた大きな力に自分を委ね、(3)棚卸し²²⁾をし、(4)メッセージを伝達する、である。各ステップの構造は、その内容から見て時系列的に段階として12まで位置づけられていることがわかる。なぜなら、ただランダムに並べてあるわけではなく、前後のステップには一定のつながりがみられるからである。「4をやると5を必要とするようになる」と言われたり、「4, 5をやったようやく1, 2, 3のステップの意味が分かるようになってくる」と述べる者がいるのはそのためである。すなわち、連鎖的なつながりによって認識の変化が起こりうるようなシステムになっているということである。以下の文章はAAの月刊誌で、そこに寄せられた12ステップについての記述である。ステップがいつの間にかループ状になっており、自己が再びステップと対面する様子が語られている²³⁾。

「私は今までミーティングの中で何べん12の階段を上がっては降り、降りては上がったことだろ

表1 AAの12ステップ

1. 私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
2. 自分を越えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行い、それを表に作った。
5. 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
7. 私たちの短所を取り除いてくださいと、謙虚に神に求めた。
8. 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。
11. 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。
12. これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールクに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

[NPO法人AA日本ゼネラルサービス, 2001年改訂版より (初版1982)]

う。また、ステップとは不思議なものでひと廻りすると、次の一つ一つの階段は、私を新鮮な魅力で引きつけた。何回廻っても飽きるということがなかった。とくにステップ12を終わったあとに立ち戻ったステップ1とは、深い感動を持って対面するのだった。」[NPO法人AA日本ゼネラルサービス, 2004: 38]

「ステップとは不思議なものでひと廻りすると、次の一つ一つの階段は、私を新鮮な魅力で引きつけた」という部分から分かるのは、このメンバーがステップの円環的連鎖システムのなかに、自己認識の変容を見いだしているという点である。「不思議」という言葉が示すように、なぜステップが再び新鮮な魅力でもって自己を引きつけ、新たにステップを歩ませるのかという疑問は、まさにサイバネティクスな問いである。ステップに組み込まれているサイバネティクスな側面が、このメンバーの認識上ではっきりとはしないかたちで捉えられているとも言い換えられる。なぜ明確に認識されえないのかといえ、12ステップというシステムの中でフィードバックされている自己は、かろうじて認識できるような可変的な自己だからである。

そこで次に、サイバネティクスでみるAAプログラムの目的という視点から、12ステップをみてみたい。AAの全体論的な目的は「依存症者とのメンバーとの分裂生成の回避」であったが、12ステップでは、対称的なパターンを増幅しないシステムが具体的にどう働いているのだろうか。まず考えてみるべきは、この繰り返しおこなわれるステップが示すように、12ステップの先にはゴールとして断酒があるわけではないという点である。ステップの段階は回復の進行状況を表すわけではなく、それゆえ他者と競い合うような対称的なシステムにはなりえない。相対的評価のための「ものさし」にはなりえないために、依存症者は12ステップを他者と張り合うために使うことができないのである。それはつまり、12ステップが、対称型の相互作用システムを回避するようなシステムだということである。

だが12ステップがさらに興味深いのは、ステップについて話をする場であるステップ・セミナーでは、相補的な相互作用のシステムを回避するようかたちでステップが用いられているという点である。多くの場合にステップ・セミナーでは、12のステップを2ステップずつの6セットに分けたうえで、代

表者が「スピーカー（話し手）」として、その担当したステップの内容に応じて話しをするという形式をとっている。このステップ・セミナーでは、ステップ1を新参者（ビギナー）が担当するのではないのと同時に、ステップ12をAAでの経験年数の長い古参者（ロング・タイマー）が担当するわけではないのである。すなわち12ステップは、対称型分裂生成を抑制するようにプログラムされているのである。

それに加えて、ステップ・セミナーでよく聞かれるような「自分がこのステップについて話すのにふさわしいかどうかはわからないが…」という発言からわかるのは、そのステップをマスターした者だけに、話をする権限が与えられているわけではないということである。つまり12ステップは、メンバー間の上下関係によって起こる相補型の分裂生成を回避するシステムでもあるといえるのである。

3.3 AAプログラムのシステムとクライマックスの回避

AAプログラムは、対称型と相補型を回避するシステムが混在することにより、分裂生成を起こりにくくしている側面が見てとれる。だが、システム上の混在による集団内の関係性の安定は、ベイトソンの概念でいう「交換型の関係」[ベイトソン, 1972: 68-69 (邦訳126)]によって起こったのではない。なぜなら、少なくとも筆者が調査を行った限りではあるが、「交換型の関係」の特徴である、対称型と相補型の相殺関係がAAプログラム内では確認できなかったからである。つまり、AAメンバーが関係性の役割を交換することによって集団の安定をはかるというようなシステムが、AAのプログラムの実践においてはみられないのである。

では、システムとしてのAAプログラムによる分裂生成の回避は、どのように解釈すればよいのだろうか。この点を、再びベイトソンによる集団分析概念によって解釈し直すことで、最後のまとめとした。

ベイトソンは、イアトルム族で確認した分裂生成を引き起こしうる関係性のパターンが、バリ島人の間ではあまり見られなかったと指摘した。そうした関係性のパターンが起こらない要因は、バリ島社会がクライマックスのパターンを避けるような関係性のシステムを備えているからである。クライマックスのパターンを避ける事例としてベイトソンが取り上げるのは、バリ島社会の母子関係の相互作用についてである。たとえば母親が子どもの性器を引っ張るなどし、戯れの行為を仕掛ける。それに刺激された子どもは、母親との累積的相互作用を求めるのだが、母親は子どもから注意をそらし、子どもの誘いには乗らないのである。ベイトソンによれば、子どもに応じ返さないというクライマックスを避けるかたちでの母親のこうした行動は、累積的相互作用を求めても報われないことがあるということ子どもに教え込む学習のコンテキストになっているという [ベイトソン, 1972: 112-115 (邦訳177-182)]。

こうした累積的相互作用の避け方を子どものときから学習することが、競争と張り合いへ向かおうとする子どもたちの傾向を押さえ込むと同時に、ひいてはバリ島が非分裂生成的な社会である一因にもなっているという。ベイトソンは、バリ島の社会組織や日常生活のコンテキストが競争的な相互作用を許さず、クライマックスとしての争いを避けるのを、バリ島文化として位置づけた。なぜなら、分裂生成的ではないバリ島の社会システムは、それまでフィールドワークを行ったどの社会とも違ううえに、マルクス主義的な理論に基づいた社会システムとも明確に異なったからである [ベイトソン, 1972: 115 (邦訳181)]。ベイトソンによれば、争いごとを処理する独特の技術が、バリ島文化には存在するという。具体的には、個人間の敵対関係を友好関係へ促すという解決方法ではなく、むしろ互い

の敵対関係を正式に登録したうえで一定の敵対状態で凍結したり、集団間で戦いを行うにしても、そこに衝突防止の要素を数多く仕込むなど、クライマックスとしての争いを避けるような手段がとられている。

相互行為にクライマックスを避けることで集団を安定させるようなこうした傾向は、AAプログラムのシステムにもあらわれているといえる。なぜならミーティングでの「言いつばし聞きつばなし」というルールは、聞いている相手がいるにもかかわらず、相手からの応答はなく、話し手側の累積的相互作用への期待は裏切られるからである。つまりこれは、相互関係におけるクライマックスを避けているとみなすことができる。12ステップにも、その傾向は強くあらわれている。つまり、12ステップはどのステップが上位レベルであるかとはいえず、またどれだけステップをこなしても他のメンバーとの間に競争関係を持ち込む手段にはなりえない。つまり、対抗関係によるクライマックスは生じえないのである。

集団過程というレベルから捉えるならば、AAのプログラムはバリ島社会において特異的にみられるような、クライマックスを避けるかたちでのシステムから成り立っているといえる。これがAAという集団内での分裂生成を回避する要素のひとつとなっており、AAに通いはじめたばかりのアルコール依存症者に、ミーティングでの相補的な自己や12ステップに何度も挑戦する自己を認識させるということができる。AAメンバーが、「なぜかはわからないがそうしていた」、あるいは「なぜだかわからないがそう感じる」という、自己認識を完全なかたちでは得ないようなかたちで、AAプログラムの作用を認識するのはそのためである。つまり、対称的パターンや対抗関係が不完全なかたちで収束していくようなシステムがAAプログラムにはたらいっているのだが、それはサイバネティックスの視点を用いてようやく捉えられるような現象なのである。

そしてその要素が自らの回復にも大きく関わっているようだ

結論と今後の課題

サイバネティックスの視点から分析することにより、AAプログラムには集団過程として分裂生成を回避するシステム機能が働いていることを明らかにしてきた。ミーティングは、「言いつばし聞きつばなし」の原則が対称的パターンを回避させ、12ステップは年功序列やソプラエティの長短に結びつけないかたちで実践されており、それが集団内の対称的パターンを制御していると分析できた。これをまとめると以下に挙げた図1のようになるが、AAの目的は依存症者レベルから捉える場合と、集団レベルから捉える場合を比べると大きく異なることがわかる。本稿で取り上げたAAメンバーたちが語った「なぜかはわからないがそうしていた」というような作用は、集団レベルでの作用である。これは、サイバネティックスな視点からこそ見えてくる側面である。つまり、依存症者レベルからAAプログラムの回復効果を細分化してAAの成功因子とするだけでは説明しきれないような全体論的な機能を明らかにすることができるのである。

特にシステム内の機能が経験的なアプローチからプログラム化されている場合、そこには未だ明確に認知され得てはいないものの回復に有効な手段が隠されていることもありうる。この点をふまえた上で、今後の課題として次の3つを挙げておきたい。

第一に本論文は、日本のAAに焦点をあてており、なおかつ筆者が調査した特定のAAグループやそこに現在もつながっているAAメンバーの語りを取り上げている。だが当然のことながら、AAプログ

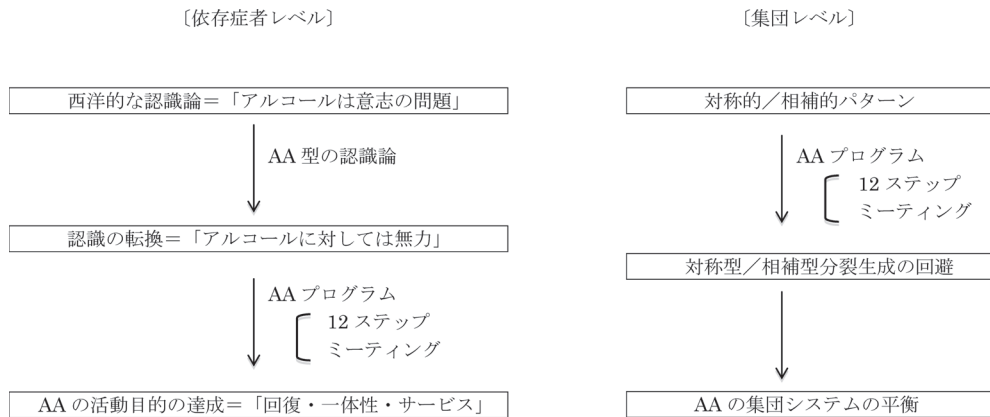


図1 目的論的な視点から捉えるAAのプログラムの作用

ラムの実践は、国や地域、文化、そしてグループによっても異なるだろう。筆者が参加した限りではあるが、日本国内においても、関東と関西、都心と地方などによって違いがあるという印象である。今後はこうした差異をどのように解釈するべきかが課題となるだろう。

第二に、AAのプログラムだけでは回復できなかった依存症者が、マックをはじめとする回復施設や精神科病院、AA以外の自助グループなどを通じて回復の道を辿るケースを分析する必要がある。各機関の特性を相互関連的にみることで、依存症の回復に何が必要なのかをむやみに一般化せず、個人差にも目を向けられるようになるだろう。

第三に本研究は、システムをAA内に限定し、依存症者との対称的な相互作用のパターンを軸に議論をすすめた。だが、依存症者はAAにのみ所属しているのではなく、家族や社会集団にも身を置いている。そうした領域にまでサイバネティックスの視点を適用すれば、AAでの回復にとどまらず、あらゆる集団における回復の可能性を開くことができるかもしれない。

人間の生き方や関係性に揺さぶりをかけているような現象をサイバネティックスの視点から分析することで、回復のための潜在的な「力」を再発見できるのではないだろうか。

注

- 1) AAの歴史や設立の経緯に関しては、Alcoholics Anonymous World Services (1990)などを参照されたい。
- 2) 12ステップは、AAが、1939年にそれまでの活動とそこから学び取ったものを、特定の筆者に依拠せず話し合いによってまとめたものである。その経緯は、AA日本ゼネラルサービス(2006:72-82)に記されている。
- 3) 中間施設とは、医療機関を退院後の依存症者に対して、社会復帰に向けたプログラムを提供する施設である。
- 4) AAは、アジア、アフリカ、中近東など180カ国以上に存在する。メンバー数は、メンバーシップサーベイが行われている日本やアメリカ、カナダを合計しただけでも、2009年の時点で200万人を超えているとされる。Alcoholics Anonymous World ServicesのHP、パンフレット、資料を参照。
- 5) AAのグループは、2009年の時点で日本に500以上あり、そのうち東京には100以上のグループがある[NPO法人AA日本ゼネラルサービス(JSO),2002]。よって筆者の調査したAA以外にもグループはあるため、「特定の」と限定的に表現した。
- 6) マック(MAC)とは、メリノール・アルコール・センターの略であり、飲酒をやめたい依存症者に対して、回復のための「マックプログラム」を提供し社会復帰を支援する中間施設である。

- 7) 本論文では、「認識」という場合には個人の認識次元を指し、「認識論」という場合にはアルコール依存の世界やAAでの体系的知識を指すことにして使い分けている。
- 8) AAには、病院などの治療施設へ行って自らの体験を話す「メッセージ」活動もあるが、これは12ステップの活動の一部である。また、匿名性や古参者が新参者をサポートするスポンサーシップといった特徴も、回復のためのプログラムの一要素として挙げられる。ミーティングに関する分析は、Gabrielle (2001: 58-77) を参照されたい。
- 9) AAアメリカ/カナダ評議会の出版する『AA Fact File』を参照。『AA Fact File』はAAゼネラルサービス・オフィスのHPで公開されているほか、その一部を邦訳したものがNPO法人AA日本ゼネラルサービス (2002) に載っている。なお『AA Fact File』では、「12ステップ」とともにAAのプログラムを構成するものとして、「12の伝統」と「12の概念」が挙げられている。しかし、「12の伝統」と「12の概念」は、共同体としての「一体性」や「サービス」についての基本的な考えをまとめたものである。つまり、運営資金確保について (AAは、企業や外部組織の寄付を受け付けず、あくまで個人の自発的な献金でのみ支えられ運営されている)、あるいは評議会や広報活動のあり方など、いわゆるAAがAAとして機能するためのルールにあたる。ゆえに、12ステップと比較すると、個人の直接的な回復のために書かれたというよりも、より実務的なきまりとして書かれたものであるため、本稿では扱わない。
- 10) 生態学の中でも人間集団の生態を対象とした研究分野は、人類生態学と呼ばれており、大塚柳太郎ほか (2002) などが参考となる。
- 11) ここでの「観念」とは、システム回路のなかを変容しながらめぐっていく「差異」のことである。ベイトソンは、斧で木を切る際に、斧が最初に木に付けた切り目によって、次の斧の振り下ろしは制御されているという点を示唆し、ほかにも目や脳なども含めたシステム全体に差違が生じており、それぞれに対して差違がまたフィードバックされていくという事例をあげている。そうした差違のひとつひとつが情報のユニットであり、それが「観念」であると定義している [ベイトソン, 1972: 317-318 (邦訳431)]。
- 12) ベイトソンは、「存在の論理」を問う「Ontology」と「認識の論理」を問う「Epistemology」の両方の意味として「認識論 (エピステモロジー)」を用いている [ベイトソン, 1972: 313-315 (邦訳426-428)]。つまりここでの「認識論 (エピステモロジー)」には、人的・事物的環境への適応と不適応を統御する前提のネットワークがもつ二つの面が含まれている。
- 13) AAではAlcoholicやAlcoholismを、カタカナ表記でそれぞれアルコホーリックやアルコリズムと表記している。その理由については、アルコール依存症 (者)、アルコール症 (者)、アルコール中毒 (者) 等の表現が日本ではなされているが、そのなかから一つの表現を選択することは誤解が生じる可能性があるためだとしている [アルコホーリクス・アノニマス・ワールドサービス社, 1979]。本論文では、アメリカ精神医学会が策定・刊行している疾病診断基準であるDSM-IV (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV) の中の「Alcohol Dependence」という分類表記や、WHOによるICD-10 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems-10) の「Alcohol Dependence Syndrome」、さらに日本の厚生労働省が厚生白書にて用いている「アルコール依存症」という表現にもとづき表記しているが、AAの出版物からの引用部分についてはAAの表記に従っている。
- 14) AAのシンボルマークはこの3つを意味するように形作られており、この3つはAAのレガシー (遺産) とされている [アルコホーリクス・アノニマス・ワールドサービス社, 1990: 73-331]。
- 15) [] 内は筆者による補足。
- 16) AAには、一定期間断酒した人にメダルを渡すという活動があり、断酒期間によって渡されるメダルの色が異なる。初めてAAを訪れたメンバーに渡されるのが「ワンデーメダル」であり、これは、ミーティングに来た日の1日、飲まずにいられたことを意味して渡される。なお、再飲酒してしまった場合にも、次にミーティングに参加した際には同じ色のメダルが渡される。
- 17) 2010.6.27におこなったアルコール依存症者の匿名男性へのインタビューから。彼はインタビュー当時12年間の断酒に成功しており、AAに初めて行ったときの印象をこう語った。
- 18) インタビューにおいて、非調査者 (語り手) の語りをどのような方法で分析するのかは、聞き手側である調査者の立場が問われてくる重要な問題である。インタビューを非調査者 (語り手) と調査者 (聞き手) の相互行為として捉えるならば、本来は〈ライフヒストリー〉や〈ライフストーリー〉の理論をふまえた上で筆者の

分析方法や立場を提示すべきなのだが、本稿はこうした課題があるということを追記するにとどめたい。なお質的調査方法については、アルコール依存症者の語りを主な事例として「解釈的相互作用論」を展開している Denzin (1989) が参考となるが、ほかにも桜井 (2002) などが参考となる。

- 19) ただし、言語表現以外によって対称的な相互作用のパターンがとられてしまうこともある。松田 (2007) は、ある人が話しだすとみんながトイレに行くなど、非言語的なパワーゲームが生じ、これが「仲間の話」という回復のための資源への障壁になりうると指摘する。筆者が確認したなかにも、相手への共感や不快感を示すための様々な言動の仕方がとられていた。たとえば、発言の順番が回ってきたら自らのニックネームを名乗り、それに呼応して他のメンバーが発言者の名前を繰り返すという習慣がAAにはある。その際に、声の調子や大きさによって相手に対して抱いている感情を示すことができる。もっとエスカレートしたケースでは、自分が司会になった時には、気に入らないメンバーをあてないことがあると話してくれたメンバーもいた。しかしながら、松田は、インタビューしたAAメンバーがパワーゲームを肯定的なものとして意味づけようとしている点に注目する。それは、このメンバーがAAを小さな社会としてとらえ、パワーゲームや否定的な感情を前提としながらも、よい人間関係を見いだそうとしていることから明らかにされている。さらにこのメンバーは、そうした否定的なものにコントロールされないようになっていくことが大事だと述べている。こうした点から松田は、パワーゲームが回復のための資源へのアクセスの妨げになりうる一方で、回復の実践にとって必要な資源になりうるのではないかと指摘するのである。女性がパワーゲームを肯定的に捉えるという松田の例は非常に興味深いのが、この事例では対称的なパターンを回避しているのが、AAのシステムではなく、自己の認識の変容であるため、注にとどめておく。
- 20) 表1参照。その経緯は、AA日本ゼネラルサービス (2006: 72-82) に記されている。
- 21) ミーティングの開始時には、読み合わせも行われている。
- 22) 「棚卸し」とは、自分の長所と欠点を見つめて、自らの行いを振り返り、自分のしたことを書き出すなどし、それを誰かに聞いてもらうという手順で行われる作業である。
- 23) AA評議会は、各ステップの解説や使うことによる本人への影響などを示してはいるが、少なくとも自分たちの手による出版物においては、ステップの使い方を具体的に明言してはいない。ゆえにステップを行う時期や使い方は、個人やスポンサーの助言によるところが大きい。しばしば、あるステップを飛ばしてみたり、同じステップばかりを行ってしまう場合もある。また、日常生活の道具として位置づける者もいる。ただし繰り返し使うという点と段階的に使われているのではないという点は、どのメンバーにも共通している。筆者は日本での調査においてこれを確認したにすぎないが、ステップは一過性のものとして用いられているわけではないことが、アメリカ合衆国のAAメンバーの体験記から読み取れる。

参考文献

- Bateson, Gregory, *MIND AND NATURE*, Wildwood House, 1979. (グレゴリー・ベイトソン『精神と自然—生きた世界の認識論』, 佐藤良明訳, 新思索社, 2006.)
- *Steps to an Ecology of Mind*, Ballantine Book, 1972. (グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』, 佐藤良明訳, 新思索社, 2000.)
- *Naven*, Stanford University Press, 1958, Second edition, (Original edition 1936)
- Bertalanffy, Ludwig Von, *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, George Braziller, 1968. (ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィ『一般システム理論—その基礎・発展・応用』, 長野敬ほか訳, みすず書房, 1973.)
- Cain, Carole, Personal Stories: Identity Acquisition and Self-Understanding in Alcoholics Anonymous, *Ethos*, vol. 19, No. 2, 1991, pp. 210-253.
- Denzin, Norman K, *The Alcoholic Society: Addiction and Recovery of the Self*, Transaction Publications, 1992.
- *The alcoholic self*, Sage Publications, 1987.
- *The recovering alcoholic*, Sage Publications, 1987.
- Fainzang, Sylvie, When Alcoholics Are Not Anonymous, *Medical Anthropology Quarterly*, 8(3), 1994, pp. 336-345.
- Gabrielle, Swora Maria, Commemoration and the Healing of Memories in Alcoholics Anonymous, *Ethos*, 29(1), pp. 58-77.

- Hindman, Jane E, Making Writing Matter: Using “The Personal” to Recover [y] an Essential [ist] Tension in Academic Discourse, *College English*, 64(1), 2001, pp. 88–108.
- Kurtz, Ernest, *Not God: A History of Alcoholics Anonymous*, Hazelden, 1979.
- Kurtz, Ernest and Katherine Ketcham, *The Spirituality of Imperfection: Storytelling and the Journey to Wholeness*, Bantam Books, 1992.
- Maines, David R., The Alcoholic Self and Its Social Circles, *The American Journal of Sociology*, 94(4), 1989, pp. 864–873.
- Miller, Toby and McHoul Alec, Helping the Self, *Duke University Press*, 1998, pp. 127–155.
- O'Halloran, Sean, Symmetry in interaction in meetings of Alcoholics Anonymous: the management of conflict, *Discourse Society*, 16(4), 2005, pp. 535–560.
- Roman, Paul M., Review: The Social Transformation of Alcohol Treatment, *Contemporary Sociology*, Vol. 17(4), 1988, pp. 532–535.
- Thoreson, Richard W, The professor at Risk: Alcohol Abuse in Academe, *The Journal of Higher Education*, 55(1), 1984, pp. 56–72.
- Wiener, Norbert, *The human use of human beings: cybernetics and society*, Eyre and Spottiswoode, 1950. (ノーバート・ウィーナー『人間機械論:サイバネティックスと社会』, 鎮目恭夫/池原止戈夫訳, みすず書房, 1954.)
- *Cybernetics or Control and Communication in the Animal and the Machine*, The M.I.T. Press, 1948. (ノーバート・ウィーナー『サイバネティックス: 動物と機械における制御と通信』, 池原止戈夫ほか訳, 岩波書店, 1957.)
- アルコホーリクス・アノニマス・ワールドサービス社『アルコホーリクス・アノニマス—成年に達する』, AA日本出版局訳編, NPO法人AA日本ゼネラルサービス(JSO), 1990. (Alcoholics Anonymous World Services, Alcoholics Anonymous Comes of Age, AAWS, 1990.)
- 『どうやって飲まないでいるか』, AA日本出版局訳編, JSO, 1979. (Alcoholics Anonymous World Services, *Living Sober*, AAWS, 1975.)
- 『12ステップと12の伝統』, AA日本出版局訳編, JSO, 1982. (A.A. Grapevine, *Twelve Steps and Twelve Traditions*, AAWS, 2001.)
- 『アルコホーリクス・アノニマス』, AA日本出版局訳編, JSO, 1979. (Alcoholics Anonymous World Services, *Alcoholics Anonymous*, AAWS, 1939.)
- 伊藤智樹『セルフヘルプ・グループの自己物語論—アルコホリズムと死別体験を例に』, ハーベスト社, 2009.
- 「セルフヘルプ・グループと個人の物語」『社会学評論』, 51(1), 有斐閣, pp. 88–103. 「語り」の共同体—アルコール依存の相互作用論的分析—『現代社会理論研究』(6), 現代社会理論研究会, 1996, pp. 13–28.
- 「ためらいの声—セルフヘルプ・グループ「言友会」へのナラティブ・アプローチ」『ソシオロジ』, 社会学研究会, 50(2), pp. 3–18.
- ウィルソン, ビル『AAの伝統が生まれるまで』, AA日本ゼネラルサービス, 1955.
- NPO法人AA日本ゼネラルサービス(JSO)「先駆者からのメッセージドクター・ボブが語るAAの夜明け」『BOX-916精選集: グレープバイン翻訳特集2』, 第4巻, JSO, 2006.
- 『BOX-916精選集』, 第2巻, JSO, 2004.
- 『AA日本広報資料』, JSO, 2002.
- 『スポンサーシップQ&A』, AA日本出版局訳, JSO, 1987.
- 『12のステップと12の伝統』, AA日本出版局訳, JSO, 1982.
- 大塚柳太郎ほか『人類生態学』, 東京大学出版会, 2002.
- 岡野一郎「ダブルバインドの可能性? コミュニケーションにおける共生と葛藤」『人間と社会』, 東京工業大学, 2004, pp. 108–128.
- 亀山佳明「自己変容のコミュニケーション—G・ベイトソン・ノート」『香川大学一般教育研究』, 33, 香川大学一般教育部, 1988, pp. 237–257.
- 葛西賢太『断酒が作り出す共同性? アルコール依存からの回復を信じる人々』, 世界思想社, 2007.
- 加藤武信「システム概念とサイバネティックス (I)」『城西経済学会誌』, 6(2), 成西大学, 1970, pp. 193–212.

- ギデンズ, アンソニー『親密性の変容?近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム—』松尾精文・松川昭子訳, 而立書房, 1995.
- 桜井厚『インタビューの社会学テイ, 愛情, エロティシズム—, せりか書房, 2002.
- 佐藤敬三「システム—サイバネティクスのアプローチ」『現代思想』, 通巻12-05号, 青土社, 1984, pp.120-126.
- 「サイバネティクスと一般システム論?その成立史と理論構造?」『科学と思想』, 6, 青土社, 1972, pp.225-271.
- 下司孝麿「断酒会について—酒をやめたいアルコール中毒者自身の会」『教育と医学』, 20(2), 慶應義塾大学出版会, 1972, pp.38-45.
- デンジン, ノーマン K.『エピファニーの社会学—解釈的相互作用論の核心』, 片桐雅隆ほか訳, マグロウヒル, 1992. (Norman K. Denzin, *Interpretive interactionism*, Sage Publications, 1989.)
- 野口裕二『アルコホリズムの社会学』, 日本評論社, 1996.
- 野村直樹『やさしいベイトソン』, 金剛出版, 2008.
- 橋本美枝子「Alcoholics Anonymousにおけるサービス体系の構築過程とその意義」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』, 22(2), 大分大学, 2005, pp.515-530.
- 平野かよ子『セルフ・ヘルプグループによる回復—アルコール依存症を例として』, 川島書店, 1995.
- ベイトソン, グレゴリー「認識論の病理」『現代思想』, 里麻静夫訳, 通巻12-05号, 青土社, 1984, pp.196-206.
- ホフマン, リン『家族療法の基礎理論—創始者と主要なアプローチ』, 亀口憲治訳, 朝日新聞社, 1986.
- 松田博幸「セルフヘルプ・グループの参加者による実践における「完璧であることの不可能性—AA (アルコールイクス・アノニマス)の参加者からのインタビューより—」『社会問題研究』, 56(1/2), 大阪府立大学, 2007, pp.41-62.
- 宮坂敬造「民族誌のアヴァンギャルド—人類学者ベイトソンのモノグラフと理論」『現代思想』, 通巻12-05号, 青土社, 1984, pp.69-91.
- 安川由貴子「日常の実践としての学習理論: G.ベイトソンとJ.レイヴ&E.ウェンガーのAlcoholic Anonymous (AA)をめぐり考察を手がかりに」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』, 5, 京都大学, 2006, pp.91-102.
- 山崎理央「セルフ・ヘルプ・グループの研究に関する概観と展望」『福山大学人間文化学部紀要』, 4, 福山大学, 2004, pp.11-18.
- レイヴ, ジーン&エティエンヌ ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』, 佐伯胖訳, 福島真人解説, 産業図書, 1993.
- 渡辺徹也「グレゴリー・ベイトソンの「学習」概念について」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』, 1, 京都大学, 2002, pp.103-112.